

# 子どもの心的状態を読みとる大人の能力の 個人差について

— 障害児および1歳児についての記述の分析 —<sup>1)</sup>

郷 式 徹

Individual Differences of Adults' Ability for Reading Children's Mental States:  
Analyses of Descriptions of Handicapped Children and of a One-year-old Child

GOSHIKI Toru

コミュニケーションの際には相手の感情、意図、考えなどの心的状態を推測する必要がある。言語的な相互理解の可能な大人と異なり、自身の心的状態を言葉で伝えることの難しい乳幼児や障害児の場合、心的状態の推測の負担は大きく大人の側にかかってくる。近年、心の理解（の発達）に関する研究では、大人と子どもや子ども同士の相互作用が心の理解に与える影響について注目されてきている（遠藤，1998a；丸野・岡崎，1998）。こうした影響を考えるには、大人の心的状態の理解は一律で完成したものであるという前提に基づくのではなく、実際の生活の中で大人が子どもの心的状態をどのように捉えているかを見直す必要がある。例えば、子どもと大人の相互作用場面を実際に観察したり、母親が自分の子どもについてつける育児日誌を分析する等の方法が考えられよう。しかし、これらの方法では個別の事象の記録にとどまってしまう。また、事象が生じた背景（教室、食事場面、喧嘩の仲裁、etc...）や大人の経験や背景（養育経験、経済状態、家族構成、etc...）の多様性の影響を逃れられない<sup>2)</sup>。

本研究では、大学生ボランティアによる障害児（特に言語によるコミュニケーションの難しい子ども）の保育記録を資料とした探索的分析を試みた（研究1）。この保育記録を分析対象としたのは、この記録が障害児の放課後保育という毎回同じパターンの繰り返しの記録で事象の背景が一樣であることと記録者が大学生ボランティアで、養育経験、経済状態、生活パターンなどの大人の経験や背景の一樣性が高いためである。保育記録は自由記述的な形態のため、KJ法<sup>3)</sup>（川喜田，1967）を用いて、子どもに対する大人の理解の枠組みを見いだすことにした。

それではすべての大人が子どもの心的状態を同じように推測できるのか。子どもに対する大人の理解の枠組みに個人差はないのか。この疑問に対し、研究2として研究1で見いだされた子どもに対する大人の理解の枠組みに個人差が存在するかを検討する。子どもに対する理解が大人によって異なることを示した先行研究として、Brooks-Gunn & Lewis（1984）は発達遅滞児の母親の多くは健常児の母親より自分の子どもへの応答が少ない（Yoder & Feagans（1988）より引

用)と報告している。その原因をDunst(1983)は障害児の母親は子どもに伝達の意志があるとみならず機会や応答の機会が少ないためではないか(Yoder & Feagans(1988)より引用)と主張しているが、被験者と面識のない大人と子どもの相互作用場面で子どもが伝達的(commun-icative)かを評定させると重度の障害児の母親は健常児の母親より多く、確実に伝達的であると判断していた(Yoder & Feagans, 1988)。大井(1995)は過剰に子どもに伝達を帰属する母親がいることを示唆している。また、Yoder & Feagans(1988)は子どもの障害の程度と母親が子どもに伝達を帰属する程度に関連はなく、重度の障害児の母親は軽度の障害児の母親と同じくらい多くの手がかりを子どもの行動から得ていると述べている。秋田・安見(1997)は保育者によって子どものどの特性を重視してきているかには違いがあり、各保育者の独自性が見られること、保育者は4～5個の多様な枠組みを持って子どもを見るとともに子どもの発達に応じて重視する特性が異なることを報告している。また、Wilcox, Kouri, & Caswell(1990)は、何かを伝達しようという意志を持っているとみなすかを同じ子どもについて複数の大人が判断した場合、伝達の意志があるとみなされる程度は大人によって相当異なることを見いだした。

しかし、秋田・安見(1997)やWilcox et al.(1990)では大人の個人差が何に起因しているのかはほとんど検討されていない(大井, 1995)。大井(1995)は臨床的な観察から健常乳幼児の養育経験のある大人のほうがそうでない大人より重度精神遅滞児が何かを伝達しようという意志を持っているとみなすことが少ないとの印象がある、と述べている。むろん育児を含めた様々な経験は個人差として表れるだろうが、経験以前のより一般的な原因も存在するのではないだろうか。そこで、研究3として、大人の個人差の原因について、他者意識尺度(辻, 1993)とノンバーバル感受性尺度(和田, 1991)との関連を検討することにした。他者意識とは他者へ向ける注意、関心、意識などを指し、他者意識尺度は他者の気持ちや感情などの内面情報を理解しようとする意識や関心を表す「内的他者意識」、他者の外面に対する意識や関心を表す「外的他者意識」、他者についての空想的イメージに注意を焦点づける傾向を表す「空想的他者意識」の下位尺度から構成される(辻, 1993)。そこで、子どもに対する大人の理解の個人差と関連するものとして、外的な要素(例えば、表情)を重視する人と内的な状態を重視する人の違いを検討するために他者意識尺度を選んだ。一方、ノンバーバル感受性尺度を選んだ理由はMehrabian(1986)によるとコミュニケーションでの感情情報伝達は言語が7%、表情や身ぶりなどの非言語によるものが55%を占めている(笹屋(1997)より引用)ことから、言葉で自らの内面状態を表現することの難しい乳幼児の内面状態を推測する能力と非言語的な感受性の高さの関連が考えられるためである。

## 研 究 1

通常のコミュニケーション場面での子どもに対する大人の理解の枠組みを作る。特に感情、意図、考えといった心的状態の推測についての分類枠を検討する。

### 方 法

分析の対象 京都市内で障害児学童保育を行っている民間団体<sup>4)</sup>の活動記録を資料とした。こ

の団体では、学期中は土曜の午後、夏休み中は午前9時から午後3時まで発達遅滞をとまなう様々な障害を持った子どもと学生ボランティア（指導員と呼んでいる）が一緒にいろいろなところへ遊びに行くという活動をしている。活動の際は子ども3～7人に指導員が一对一でつく。活動記録は指導員が担当の子どものその日の様子を活動後に記録したものである。本来の記録の目的は保護者に活動中の様子を知らせるためと指導員同士のその子どもに対する認識の共有のためであった。今回は記録のうち、自閉症<sup>9)</sup>児2名（Y君；男児，1985年生まれ・Rちゃん；女児，1985年生まれ）の記録を対象とした（Y君の記録；1992年7月～1993年2月の20回分，Rちゃんの記録；1992年7月～1993年3月の36回分）。この時点では、2名とも言葉でのコミュニケーションは困難で、大人からの指示や声かけも十分には理解していない。

**分析方法** 記録をセンテンスごとにY君388枚，Rちゃん631枚のカードにした。そのカードをKJ法（川喜田，1967）により分類し，カテゴリーを作った。

### 結果と考察

KJ法により活動記録の記述は大きく「子どもの行動描写」「指導員の行動や感想」「子どもの感情描写・内面推測」の3つに分類され，大カテゴリーの中には下位カテゴリーが含まれ，下位カテゴリー間で関連しあっていることが示された（図1）。図1に示された分類カテゴリーのうち感情，意図，考え等の心的状態の推測に関するカテゴリーは「子どもの感情描写・内面推測」である。「子どもの感情描写・内面推測」は「（観察可能な）子どもの感情表現・心的状態」「行動から直接推測される子どもの心的状態」「状況等から間接的に推測される子どもの心的状態」の3つの下位カテゴリーを含む（記述の例を表1に示した）。

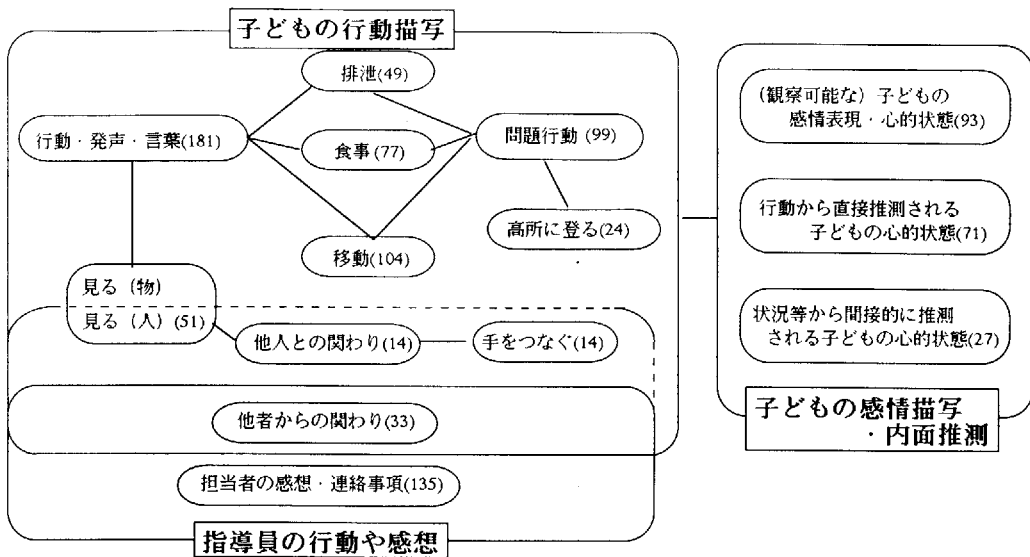


図1 KJ法による保育記録中の記述の分類

( )内の数字はそれぞれのカテゴリーに分類された記述の度数，なお，総度数は1019である。

「(観察可能な)子どもの感情表現・心的状態」は表情などから読みとれる感情状態の記述である。このカテゴリーの記述は子どもの表情(ニコニコ、嬉しそう)や不機嫌な様子を中心で、そのときの子どもの行動(や状況)とともに記述されていることが多い。ただし、「不機嫌・ぐずり」のカテゴリーでは不機嫌になった理由が推測されていることが多い。

「行動から直接推測される子どもの心的状態」では子どもの様子や行動とそのときの状況や対象の記述が多い。ただし、「(観察可能な)子どもの感情表現・心的状態」と違い、ここで記述された子どもの様子や行動は実際そうだったのか、記述者の推測なのか明確でないものが多い。「状況等から間接的に推測される子どもの心的状態」では子どもの様子や行動からその心的状態を推測している記述と子どもの様子や行動の理由として子どもの心的状態の推測の記述がされている。なお、このカテゴリーに分類された記述は状況や表情から直接には読みとれない心的状態が推測されていることが明らかな場合である。「(観察可能な)子どもの感情表現・心的状態」(特に「不機嫌・ぐずり」のカテゴリー)や「行動から直接推測される子どもの心的状態」でも理由として心的状態が推測されているように読みとれる記述があるが、これらのカテゴリーに分類された記述は先述の条件を満たしていないものである。

「(観察可能な)子どもの感情表現・心的状態」で特徴的なのはポジティブな感情の描写ではその感情が表れた状況や行動が併記されるだけなのに対し、ネガティブな感情の描写ではその感情が起こった理由(としての心的状態)が推測される事が多いことである。「状況等から間接的

表1 下位カテゴリーの記述例

子どもの感情表現・心的状態	
ニコニコ*	植物園に行くまではとても嬉しそうでニコニコしながら……
ご機嫌	帰りのバスの中ではずっとご機嫌でした
嬉しそう・楽しそう	……ほっぺを真っ赤にしながらか嬉しそうに遊んでいました。
不機嫌・ぐずり	
不機嫌・ぐずり	……引き返したら(怒って?)泣きましたが……
不機嫌にならなかった	「リュックを置きに行こうね」と言うと少し嫌がりましたが、怒ったりせずリュックを置きに行くことができました。
こだわり	……ブランコから離れようとせず、ずっと遊び続けていました
ぐずり→立ち直り	泣いていてプールに入ろうとしませんでした、しばらく膝の上でいるうちに気持ち立ち直ってきたのか……
だんだん大人しく	……だんだん大人しくなっていってしまいました。
行動から直接推測される子どもの心的状態	
満足できなかった	……現地ではあまり動かず、Yちゃんはあまり楽しめなかったかなと、思いました。
興味	……フワフワしてめくれるページに興味があったようです。
気に入った	皇子が丘のアスレチックは大変気に入ったようで5回も回りました
気が向かない	シーソーも気が向かないようでした
～な様子	……他の子が遊んでいると近寄っていかないように見えました
～したい・～しよう	……道の脇にある階段や脇道を行きたがりました
状況等から間接的に推測される子どもの心的状態	
	……水をバシャバシャと触っていたので、そこで手を洗おうと思ったのかな お母さんがいなくなった不安な心を落ちつけるためか、ぎゅっと抱きついてきました。 次に大きいプールが冷たく感じたのか最後まで温かいプールにいました。

\*各下位カテゴリーの下に便宜的にさらに下位のカテゴリーが存在する。ただし、この最も小さなカテゴリーはキーワード的なものである

に推測される子どもの心的状態」でもポジティブな状況よりネガティブな状況のほうが多い。ポジティブな感情は状況や行動から生じる心的状態を直接表していると解釈される（状況→ポジティブな感情状態→行動）のに対し、ネガティブな感情は“状況→心的状態→ネガティブな感情→心的状態→行動”というように心的状態の結果もしくは原因と解釈されているのではなかろうか。

以上の結果を受けて、研究2、3では心的状態に関する記述をポジティブな記述とネガティブな記述に分類した上で検討していくことにする。

## 研究 2

研究1で見いだされた子どもの心的状態に対する大人の理解の枠組みにおいて、大人の個人差が存在するかを検討する。研究2では、子ども7名分の保育記録を分析対象とし、子どもの個人差が（子どもの）心的状態に対する大人の理解の枠組みに影響を与えるかを検討する。また、分析対象とした保育記録は19人の指導員によって記録されている。そこで、この19人の指導員の記録に個人差が表れているかを検討する。

### 方 法

**分析対象** 研究1で用いたのと同じ保育記録のうち、92年度の夏休み期間中5日（回）以上参加している7名の子ども（対象児については表2を参照）の記録を分析対象とした。なお、夏休み期間中の記録を対象としたのは、この期間以外ではそれぞれの子どもの保育を特定の指導員が担当することが多いのに対し、夏休み期間中は様々な指導員が担当しているためである。

表2 対象児のコミュニケーションの状態

対象児	学 年	性別	障害名	コミュニケーションの状態
AI君	中学2年生	男児	自閉症*	言葉でのコミュニケーションは困難。大人からの指示や声かけは入るが、やりとりは難しい
TYちゃん	小学校4年生	女児	発達遅滞	言葉でのコミュニケーションは困難だが、指示や声かけはある程度理解しており、簡単なやりとりができる
NTちゃん	小学校2年生	女児	発達遅滞	言葉でのコミュニケーションは困難だが、大人の言うことはかなり理解しており、やりとりができる
RSちゃん	小学校2年生	女児	自閉症	言葉でのコミュニケーションは困難。大人からの指示や声かけも十分には理解していない。やりとりは難しい
KI君	小学校2年生	男児	自閉症	言葉でのコミュニケーションは困難。大人からの指示や声かけも十分には理解していない。やりとりは難しい
TKちゃん	小学校2年生	女児	発達遅滞	発音がはっきりしないが言葉もあり、大人の言うことはかなり理解しており、やりとりができる
HY君	小学校1年生	男児	自閉症	言葉でのコミュニケーションは困難。大人からの指示や声かけも十分には理解していない。やりとりは難しい

\*障害名は保護者の報告によるものである。

**分析方法** 分析対象の記録の中から、子どもの感情や心的状態の推測に関する記述を研究1で示された3つのカテゴリーについてそれぞれポジティブな記述とネガティブな記述に分類した。

結果と考察

子どもによって記述されるカテゴリーに偏りはあるのか、カテゴリー間の関係にも考慮しながら検討するために、対象児ごとに一回の記録あたりの各カテゴリーの記述の出現回数(表3)に相関行列による主成分分析を行い、固有値が1以上の第2成分までを取り上げた。第1主成分は固有値2.60、寄与率0.43、第2主成分は固有値1.92、寄与率0.32であった。主成分負荷量(表4)から第1主成分をポジティブ内面推測要素、第2主成分をネガティブ内面推測要素と名付けた。

表3 対象児ごとの各カテゴリーの記述の出現回数

	AI君	TYちゃん	NTちゃん	RSちゃん	KI君	TKちゃん	HY君	平均
(観察可能な)子どもの感情表現・心的状態ポジティブ	0.50*	1.00	0.43	0.88	1.20	0.57	0.73	0.76
(観察可能な)子どもの感情表現・心的状態ネガティブ	0.13	0.25	0.64	1.00	0.60	0.43	1.46	0.64
行動から直接推測される子どもの心的状態ポジティブ	0.56	0.50	1.79	0.25	0.60	1.86	0.73	0.90
行動から直接推測される子どもの心的状態ネガティブ	0.19	2.00	0.36	0.50	0.40	0.57	0.82	0.69
状況等から間接的に推測される子どもの心的状態ポジティブ	0.44	0.38	0.43	0.00	0.00	0.64	0.00	0.27
状況等から間接的に推測される子どもの心的状態ネガティブ	0.38	1.00	0.71	0.00	0.40	0.36	0.55	0.48
平均	0.36	0.85	0.73	0.44	0.53	0.74	0.71	0.62

\*数値は1回の記録あたりの平均出現回数

各カテゴリーの記述の出現回数(表3)と主成分得点(表5)から各子どもに対する記述の特徴が次のようなかえた。なお、第1主成分は得点が低いほどポジティブな内面推測がされていることを示し、第2主成分は得点が高いほどネガティブな内面推測がされていることを示している。HY君とKI君は第1主成分の得点は高いが、第2主成分の得点はそう高くない。これは心的状態の推測に比べて「(観察可能な)子どもの感情表現・心的状態」の記述が多いためだろう。また、RSちゃんは第1主成分の得点が高く、第2主成分の得点が低い。これは「(観察可能な)子どもの感情表現・心的状態」の記述は多いが、心的状態の推測についての記述は少ないためだろう。NTちゃんとTKちゃんは第1主成分の得点と第2主成分の得点が共に低い。これはポジティブな心的状態の推測についての記述が多いことを示している。AI君は第1主成分の

表4 対象児ごとの各カテゴリーの記述の出現回数に対する主成分分析の主成分負荷量

	主成分No 1	主成分No 2
(観察可能な)子どもの感情表現・心的状態ポジティブ	0.75	0.46
(観察可能な)子どもの感情表現・心的状態ネガティブ	0.59	-0.36
行動から直接推測される子どもの心的状態ポジティブ	-0.80	-0.24
行動から直接推測される子どもの心的状態ネガティブ	0.09	0.92
状況等から間接的に推測される子どもの心的状態ポジティブ	-0.96	0.13
状況等から間接的に推測される子どもの心的状態ネガティブ	-0.35	0.80

表5 対象児ごとの主成分得点

対象児	AI君	TYちゃん	NTちゃん	RSちゃん	KI君	TKちゃん	HY君
主成分No 1	-0.620	-0.055	-1.185	1.270	1.042	-1.323	0.871
主成分No 2	-0.476	2.371	-0.395	-0.852	0.044	-0.459	-0.233

郷式：子どもの心的状態を読みとる大人の能力の個人差について

得点がやや低く、第2主成分の得点も低い。これは心的状態に関する記述そのものが少なかったためと思われる。TYちゃんは第1主成分の得点はそう高くないが、第2主成分の得点は非常に高い。これはネガティブな心的状態の推測についての記述が多いことを示している。

すなわち、RSちゃん、HY君、KI君のような指示の通りにくい自閉症の子どもについては大人は心的な状態を推測することが難しく、表情をそのまま受け取らざるを得ないのだろう。一方、NTちゃんやTKちゃんのようにかなりコミュニケーションがはかれる子どもの場合、大人は心的状態を推測しやすく、また、遊びや会話の中でポジティブな感情を共有しやすいのであろう。また、NTちゃんやTKちゃんの場合、彼らがネガティブな心的状態になる前に状況を改善するように大人に訴えたり、また、大人の側が読みとったりできるためにネガティブな心的状態に陥りにくい可能性も考えられる。また、AIくんは自閉症児であるが、座り込んだり、パニックを起こしたりといった行動はなく指導員の指示は入りやすい一方、表情や要求行動に乏しいため、全体的に心的状態に関する記述が少なかったのだろう。TYちゃんは長時間歩いたり、待つ

表6 指導員ごとの各カテゴリーの記述の出現回数

指導員	(観察可能な)子どもの感情表現・心的状態		行動から直接推測される子どもの心的状態		状況等から間接的に推測される子どもの心的状態		平均
	ポジティブ	ネガティブ	ポジティブ	ネガティブ	ポジティブ	ネガティブ	
1	0.13	0.75	0.38	0.13	0.00	0.63	0.33
2	1.14	0.43	0.71	0.71	0.29	0.86	0.69
3	1.00	0.83	0.67	0.17	0.33	0.33	0.56
4	0.33	0.67	2.00	1.00	0.50	0.17	0.78
5	0.20	0.20	0.60	1.80	0.80	0.40	0.67
6	0.00	1.00	0.40	0.20	0.20	0.20	0.33
7	0.80	2.00	0.20	1.20	0.60	0.40	0.87
8	0.75	0.00	2.25	1.00	0.25	1.25	0.92
9	0.25	0.00	1.00	0.50	0.50	0.00	0.38
10	0.50	0.25	1.50	0.75	0.25	1.50	0.79
11	1.00	0.00	1.00	0.67	0.00	0.00	0.44
12	1.67	0.33	2.33	0.67	0.00	0.00	0.83
13	0.00	0.00	0.00	0.33	0.00	0.00	0.06
14	2.00	0.33	0.00	0.00	0.00	0.00	0.39
15	1.33	0.00	2.33	0.00	0.67	0.00	0.72
16	0.33	0.67	2.00	0.67	0.67	1.33	0.94
17	1.00	3.00	0.00	0.50	0.00	1.00	0.92
18	2.00	0.00	2.00	1.00	1.00	1.00	1.17
19	0.00	1.00	3.00	0.00	1.00	0.00	0.83

表7 対象児ごとの各カテゴリーの記述の出現回数に対する主成分分析の主成分負荷量

	主成分No.1	主成分No.2	主成分No.3
(観察可能な)子どもの感情表現・心的状態ポジティブ	0.02	-0.25	0.90
(観察可能な)子どもの感情表現・心的状態ネガティブ	-0.41	0.60	-0.13
行動から直接推測される子どもの心的状態ポジティブ	0.78	-0.35	-0.02
行動から直接推測される子どもの心的状態ネガティブ	0.50	0.59	0.13
状況等から間接的に推測される子どもの心的状態ポジティブ	0.80	0.03	-0.28
状況等から間接的に推測される子どもの心的状態ネガティブ	0.32	0.69	0.33

たりすることが難しく、座り込みや様々なこだわり行動が多く見られるためにネガティブな心的状態の推測についての記述が多くなったのだろう。

次に、カテゴリー間関係にも考慮しつつ大人の個人差を検討するため、指導員ごとに一回の記録あたりの各カテゴリーの記述の出現回数(表6)に主成分分析を行い、固有値が1以上の第3成分までを取り上げた。第1主成分は固有値1.78、寄与率0.30、第2主成分は固有値1.37、寄与率0.23、第3主成分は固有値1.04、寄与率0.17だった。主成分負荷量(表7)から第1主成分を内面推測要素、第2主成分をポジティブ-ネガティブ要素、第3成分をポジティブ表情要素と名付けた。

主成分得点(表8)は子どもの心的状態に関する記述が指導員によって大きな違いがあ

ることを示した。また、特に第1主成分の内面推測要素については女性の主成分得点の平均が0.376 (n = 10, SD = 0.759) なのに対し、男性の平均が-0.486 (n = 9, SD = 1.160) で、女性のほうが男性よりも高い傾向があった (t(17) = 1.94, p < .1)。Lewis & Feiring (1979) は子どもにとっては子ども自身の性別にかかわらず、女性のほうがなじみやすいのではないかと(内山(1997)より引用)と述べているが、上記の結果から女性のほうが男性よりも乳幼児の心的状態をよりの確に推測するためではないかと思われる。

表8 各指導員の主成分得点

指導員	性別*	主成分No.1	主成分No.2	主成分No.3
1	m	-1.170	0.183	-0.602
2	f	-0.066	0.399	0.906
3	f	-0.668	-0.333	0.127
4	f	0.671	0.006	-0.805
5	f	1.124	1.147	-0.753
6	m	-1.071	0.017	-1.227
7	m	-0.243	1.570	-0.231
8	f	1.045	0.488	0.758
9	m	0.043	-0.709	-1.019
10	m	0.544	0.932	0.484
11	f	-0.515	-0.800	0.454
12	f	0.024	-1.168	1.274
13	m	-1.209	-0.543	-0.975
14	m	-1.474	-1.232	1.608
15	f	0.615	-1.842	0.155
16	f	1.101	0.866	-0.293
17	m	-1.667	2.065	0.554
18	m	1.876	-0.006	1.704
19	f	1.042	-1.041	-2.120

\*mは男子, fは女子

### 研 究 3

研究2で子どもの心的状態に関する記述に指導員によって大きな違いがあることが示された。心的状態の推測については性差が見られたが、その他の要素については個人差の存在は確認できなかったものの、その原因は捉えられなかった。これは分析対象がそれぞれ異なる子どもや場面を異なる指導員が記録したものであったことと外的な説明基準が存在しないためだと思われる。そこで、研究3では、記録対象の子どもと場面を統制するため、子ども(健常児<sup>6)</sup>)の1歳7か月時と1歳10か月時の公園での遊び場면을撮影したビデオ映像を大学生(大学院生)に記録してもらい、その記録を分析対象とした。また、外的な説明基準として、他者意識尺度とノンバーバル感受性尺度を実施し、子どもに対する大人の理解の枠組みで見られる個人差との関連を検討する。

#### 方 法

**被験者** 養育経験のない大学生・大学院生18名。男子7人、女子11人。平均年齢25.4歳。

**刺激** ビデオ「遊びの中に見る1歳児」(田中・田中, 1996)から子どもの遊んでいる5場



郷式：子どもの心的状態を読みとる大人の能力の個人差について

面（表9）を1～2分程度抜粋して刺激とした。刺激は映像のみとし、音声は呈示しなかった。

**質問紙** 他者意識尺度（辻，1993）とノンバーバル感受性尺度（和田，1991）。項目は表10に示した。

**手続き** 子どもの遊んでいる場面を撮影したビデオ映像を被験者に見せ、子どもの様子を自由記述させた（記述1）。なお、1場面につき2度ビデオ映像を見せた。記述は再生中、再生後のいつ行っても良いものとした。5場面すべてに自由記述を行った後、子どもの表情からわかる感

表9 ビデオ映像の内容

時間*	年齢**	内容
エピソード1	1分50秒	1歳7か月 近くの公園までお母さんと同年齢の友達（とそのお母さん）と行く途中の場面
エピソード2	1分20秒	1歳7か月 すべり台に登ってすべりおりるが、スピードが出すぎて下に降りたところで転んでしまう。お母さんに砂をはらってもらって、また他の遊びに向かう。
エピソード3	1分10秒	1歳7か月 バケツの中の砂をスプーンで取り出し、ベンチの上に小山をいくつも作っていく。
エピソード4	1分10秒	1歳10か月 すべり台の（鉄の梯子状の）曲線のステップを上がろうとしている場面。お母さんに助けをもらいながら登るが、途中で足がステップから外れて落ちそうになる。
エピソード5	2分50秒	1歳10か月 砂場でバケツに砂を入れているが、途中で友達にバケツを取られてしまい、お母さんのところに助けを求めていったりして、最後に再びバケツに砂を入れさせてもらうことができた。

\*各エピソードの呈示時間

\*\*記述対象の子どもの年齢。なお、どのエピソードも同じ子どもで、撮影された時期が異なる。

表10 他者意識尺度とノンバーバル感受性尺度の項目

内的他者意識	1 他者の心の動きをいつも分析している 5 人の考えを絶えず読み取ろうとしている 6 人のちょっとした気分の変化でも敏感に感じてしまう 7 他者の態度や表情を気をつけて見るようにしている 8 人の気持ちを理解するように常に心がけている 11 人の言動には絶えず注意を払っている 12 他者のちょっとした表情の変化でも見逃さない
他者意識尺度 外的他者意識	3 人の外見に気をとられやすい 4 表面的な他者の印象に心を奪われやすい 9 他者の服装や化粧などが気になる 13 人の体形やスタイルなどに関心がある
空想的他者意識	2 人のことをよく空想する 10 人のことをあれこれと考えていることが多い 14 人のことにしばしば思いをめぐらす 15 人のことがいろいろと心に浮かぶ
ノンバーバル感受性尺度	1 私と同じくらい敏感に人の行動を理解できる人は誰もいない。 2 他人同士の会話のやりとりを見て、その人達の性格をいつも間違えることなく話すことができる。 3 人が私に本当の気持ちを隠すことはほとんど不可能である（私はいつも分かる）。 4 私は初めて会った時に、その人の性格特徴を正しく判断することができる。 5 しばしば人から、何事にも敏感で理解力のある人だと言われる。 6 私は幸せなふりも、悲しいふりも簡単にすることができる。

情状態、行動や状況から推測される意図や考え等の心的状態について記述する（記述2）よう教示し、再び5場面のビデオ映像を見せた。ただし、今回は各場面1回しか見せなかった。

最後に、上記の質問紙を行った。実施時間は約40分程度で、2, 3人の小集団で行った。

結果と考察

研究2と同様に子どもの感情や心的状態の推測に関する記述を研究1で示された3つのカテゴリーについてそれぞれポジティブな記述とネガティブな記述に分類した。なお、被験者ごとに各カテゴリーの記述の出現回数と他者意識尺度の下位尺度およびノンバーバル感受性尺度の平均得点をまとめたものが表11である。

表11 被験者ごとの各カテゴリーの記述の出現回数と他者意識、ノンバーバル感受性尺度の得点

被験者		1	2	3	4	5	6	7	8	9	10	11	12	13	14	15	16	17	18	
性別*		m	m	m	f	m	f	f	f	f	m	m	f	f	m	f	f	f	f	
内的他者意識		3.71	3.57	2.14	2.71	2.86	3.00	3.43	3.43	2.71	4.29	3.29	3.14	4.14	2.14	3.86	2.86	3.57	4.14	
外的他者意識		1.50	1.50	2.50	3.25	2.50	3.00	1.75	3.50	2.25	4.25	2.00	3.00	2.75	3.75	4.75	3.50	4.00	3.50	
空想的他者意識		2.50	2.25	2.50	2.00	3.75	4.75	4.50	3.25	1.50	4.00	1.25	4.00	3.75	3.50	3.75	2.00	3.75	4.00	
ノンバーバル		2.33	2.67	1.17	1.17	1.17	1.50	2.17	1.83	1.67	3.50	2.83	2.00	2.67	1.33	2.83	1.50	1.33	2.33	
記述1	(観察可能な)子どもの感情表現・心的状態ポジティブ	1	3	1	2	0	0	1	4	1	2	3	1	1	1	1	0	3	2	
	(観察可能な)子どもの感情表現・心的状態ネガティブ	1	1	0	0	1	1	1	2	2	1	1	0	2	0	1	1	2	5	
	行動から直接推測される子どもの心的状態ポジティブ	1	4	1	2	2	2	4	7	1	3	4	0	0	1	1	1	2	4	
	行動から直接推測される子どもの心的状態ネガティブ	0	1	0	0	1	0	0	0	2	0	0	0	1	1	2	0	3	2	
	状況等から間接的に推測される子どもの心的状態ポジティブ	0	0	0	0	1	0	1	3	0	0	0	1	1	1	0	0	0	6	
	状況等から間接的に推測される子どもの心的状態ネガティブ	0	0	0	0	1	2	0	0	0	3	1	0	0	1	0	0	2	0	
記述2	(観察可能な)子どもの感情表現・心的状態ポジティブ	1	4	5	3	2	3	2	2	2	2	4	5	5	3	2	2	4	3	6
	(観察可能な)子どもの感情表現・心的状態ネガティブ	0	2	3	0	0	2	0	1	1	0	1	2	0	0	0	0	2	0	4
	行動から直接推測される子どもの心的状態ポジティブ	1	7	6	6	4	5	8	6	3	2	7	4	7	11	7	3	5	4	
	行動から直接推測される子どもの心的状態ネガティブ	1	1	2	3	2	1	1	2	0	2	0	1	0	2	2	2	3	2	
	状況等から間接的に推測される子どもの心的状態ポジティブ	5	3	0	4	9	10	7	3	7	2	1	1	2	7	3	2	3	11	
	状況等から間接的に推測される子どもの心的状態ネガティブ	3	5	0	3	8	6	2	0	1	9	5	4	4	10	4	3	8	4	

\*mは男子、fは女子

記述に偏りはあるのか、カテゴリー間の関係にも考慮しながら検討するために、記述1と記述2それぞれの各カテゴリーの記述の出現回数について主成分分析を行った。その結果から、固有値が1以上の第3成分までを取り上げた。記述1については、第1主成分は固有値2.57、寄与率0.43、第2主成分は固有値1.37、寄与率0.23、第3主成分は固有値1.12、寄与率0.19であった。主成分負荷量（表12）から第1主成分を（心的記述の）総合力要素、第2主成分をポジティブネガティブ要素、第3主成分を（ネガティブな心的記述の）間接推測能力要素と名付けた。

また、記述2について第1主成分は固有値1.92、寄与率0.32、第2主成分は固有値1.22、寄与率0.20、第3主成分は固有値1.09、寄与率0.18であった。主成分負荷量（表12）からは第1主成分を表情読みとり能力要素、第2主成分を（心的記述の）総合力要素、第3主成分を（ポジティブな）状況-行動読みとり要素と名付けた。

心的状態の記述における個人差の原因を検討するため、各主成分について各被験者の主成分得点を目的変数とし、他者意識尺度の下位尺度（他者意識、外的他者意識、空想的他者意識）とノンバーバル感受性尺度の平均得点と性別を説明変数として重回帰分析（変数選択はstepwise method）を行った。なお、性別を説明変数の一つとしたのは研究2において女性のほうが男性よりも子どもの心的状態をより推測する傾向が見られたためである。重回帰分析の結果（表13）、記述1の第1主成分「総合力要素」は内的他者意識によって、第3主成分「（ネガティブな心的

郷式：子どもの心的状態を読みとる大人の能力の個人差について

表12 被験者ごとの各カテゴリーの記述1, 記述2の  
出現回数に対する主成分分析の主成分負荷量

	記述 1			記述 2		
	主成分No.1	主成分No.2	主成分No.3	主成分No.1	主成分No.2	主成分No.3
(観察可能な) 子どもの感情表現・心的状態ポジティブ	0.67	0.50	0.20	0.83	0.37	-0.27
(観察可能な) 子どもの感情表現・心的状態ネガティブ	0.84	-0.43	0.06	0.90	0.26	0.18
行動から直接推測される子どもの心的状態ポジティブ	0.74	0.60	-0.02	-0.29	0.03	-0.52
行動から直接推測される子どもの心的状態ネガティブ	0.36	-0.69	0.49	-0.18	0.66	-0.25
状況等から間接的に推測される子どもの心的状態ポジティブ	0.85	-0.16	-0.30	-0.24	0.39	0.80
状況等から間接的に推測される子どもの心的状態ネガティブ	-0.10	0.26	0.87	-0.50	0.65	-0.12

表13 重回帰分析の結果

目的変数 説明変数	記述 1			記述 2		
	第1主成分	第2主成分	第3主成分	第1主成分	第2主成分	第3主成分
内的他者意識	0.49*					
外的他者意識			0.53*		0.50*	
空想的他者意識 ノンバーバル						
性別		-0.35	-0.34			
重相関係数	0.49*	0.35	0.53*		0.50*	

数値は標準偏回帰係数。空欄はステップワイズ法で選択されなかった変数である。  
\*は  $p < .05$  を + は  $p < .1$  を示す。

記述の) 間接推測能力要素」は外的他者意識と性別によって影響されることが示された。また、記述2の第2主成分「総合力要素」は外的他者意識によって影響されることが示された。

この結果から他者の内面情報に対する意識や関心(内的他者意識)が高い人ほど心的状態の記述が多い、すなわち子どもの心的状態に敏感であると言える。しかし、「行動から直接推測される子どもの心的状態」、「状況等から間接的に推測される子どもの心的状態」についてネガティブな心的状態の記述が多かった人は他者の外面に対する意識や関心(外的他者意識)が高く、また、性差も関連していると思われる<sup>7)</sup>。すなわち、子どもの心的状態に敏感であるためには内的他者意識が高いことが要求されるのに対し、研究1でネガティブな心的状態の記述にはその原因の記述を伴うことが多いと指摘したように、ネガティブな心的状態をもたらした原因を映像中の子どもの表情などに求めるため、外的他者意識の高いことが要求されるのだろう。さらに、記述2のように心的状態について記述するように教示された場合には、心的状態を示す現象を観察しようとする意識が高まるため、外的他者意識の高い人ほど多くの記述を行えるのだろう。

## 総 合 考 察

研究1では、大人の記述する子どもの感情描写や心的状態は「(観察可能な)感情表現・心的状態」、「行動から直接推測される心的状態」、「状況等から間接的に推測される心的状態」の3つのカテゴリーに分類された。また、ネガティブな心的状態の記述にはその背景や理由が伴われる

ことが多いことが指摘された。研究2では、子どもの障害種別やコミュニケーション能力が記述に影響を与えること、また、大人にも大きな個人差があることが示された。大人の個人差の原因を検討した研究3では子どもの感情描写や心的状態に対する敏感さが他者の内面情報を理解しようとする意識の程度により説明されるとともに、ネガティブな心的状態に対する敏感さは他者の外面に対する意識の程度により説明される。これはネガティブな心的状態の原因を表情や状況など外面的な情報に見いだそうとするためではないかと解釈された。

本稿では大人が子どもの心的状態を読みとる能力には個人差があることが示されたが、養育者の個人差が子どもの発達に影響を及ぼすことを示唆した研究として、園田・無藤(1996)は個人差として内的状態に言及しやすい母親は、子どもとの相互作用で内的状態(特に感情状態)に言及しやすく、母親の内的状態への言及は後の子どもの内的状態への言及を予測し、さらに子どもの内的状態への言及は後の子どもの他者理解を予測すると述べている。一方、そのような個人差がありながら、ほとんどの人が養育者としての特別の訓練なしに、親として子どもの心や心の気づきの発達を保障する関わりをもち得る(遠藤, 1998a)。そのため、Papousek & Papousek(1987)は乳児にかかわる養育者に対人相互作用の発現や発達を促進的に進行させるある種の生得的機構が備わっている可能性(遠藤(1998b)より引用)を指摘している。心の理解の発達を支える養育者の働きかけが社会構成的なものか生得的なものかは今後の議論を待たなければならないが、今後、大人と子どもの相互作用が心の理解の発達に及ぼす影響を議論する際には大人の側の個人差も考慮すべきであろう。また、通常の相互作用で大人が子どもの心的状態を読みとる能力が問題となることは少ないだろうが、障害児の療育や臨床的な観察を行う際の観察者の能力や個人差を客観的に捉える方法は現在の療育や臨床場面の中でより積極的に取り入れられても良いのではないだろうか。また、療育者や臨床家の養成にもそのような方法は役立つだろう。

最後に本研究の問題について指摘しておきたい。本研究(特に研究3)では子どもの心的状態を読みとる大人の能力の個人差の原因を検討したが、得られた結果はまだ実用に耐えるものではない。これは個人差を説明する要因として選んだのが他者意識尺度とノンバーバル感受性尺度と少なく、他にも子どもとの接触経験、兄弟の有無などの要因も今後検討する必要があるだろう。また、今後、他者意識尺度等より高い説明力を持つ指標を探す必要があるだろう。

#### 註

- 1) 本稿作成にあたり、ご指導を賜りました京都大学大学院教育学研究科子安増生教授、保育記録を提供して下さった障害児学童じゃりんこの皆さんに深く感謝の意を表します。
- 2) 加えて質的な資料から客観的な分類枠や法則を取り出す方法が未完成であることも指摘されよう。しかし、実際の生活場면을強調するあまり、客観的な分類枠や法則と事象の個別性に対する記述の両立がなされていないのかもしれない。
- 3) KJ法は社会人類学者川喜田二郎が、探検調査の結果をまとめるため考案した資料整理法であるが、その後問題解決のための集団討議法としても活用、開発されつつある。KJ法で重要なのは基準や枠組みを設定した上でデータを分類するのではなく、データから結果的に分類枠を作り上げる(佐藤, 1997)ことで、本研究の資料を分析するには今のところ最適な方法だと思われる。
- 4) 保育記録を提供していただいた障害児学童じゃりんこは障害児とその親と(学生)指導員により障害を持つ児童・生徒の「豊かな放課後」保障、長期休業中の生活の豊かさを追求するため1991年に設立され、現在も活動を続けている。なお、研究1の一部は、日本発達心理学会第9回大会におい

郷式：子どもの心的状態を読みとる大人の能力の個人差について

て発表された(郷式, 1998)。

- 5) 本稿で用いた障害名は保護者の報告による。保護者の報告は基本的に医師や発達相談の専門家の意見に沿っており、本研究は言語的なコミュニケーションの困難な子ども(の心的状態)に対する大人の理解を検討するものであり、詳細な医学的診断等は必要ないと判断した。
- 6) 研究1, 2の場合, 対象児の保育経験のある指導員が記録を行っているため対象児に対する知識があるのに対し, 研究3は面識のない子どもの心的状態を映像のみから推測するという状況である。障害児の心的状態の把握では健常児以上にその子どもについての知識が手掛かりとなると思われる。これらの点を考慮し, 研究3では健常児を記録の対象とした。
- 7) 研究2とは異なり「(ネガティブな心的記述の)間接推測能力要素」の主成分得点に男女差はない(男性0.20 (SD = 0.93), 女性-0.13 (SD = 1.11),  $t(16) = 0.64$ , n.s.)。

引用文献

- 秋田喜代美・安見克夫 1987 園児を捉える保育者の見方 — RCRT法による検討 — 立教大学心理学科年報, 39, 33-41.
- 遠藤利彦 1998a 第1章乳幼児期における親子の心のつながり — 心の発達を支えるものとしての関係性 — 丸野俊一・子安増生(編著) 子どもが「こころ」に気づくとき ミネルヴァ書房 Pp. 1-31.
- 遠藤利彦 1998b 関係性と子どもの社会情緒的発達 — 日本の乳幼児研究の1年を振り返る — 教育心理学年報, 37, 37-54.
- 郷式 徹 1998 子どもの感情・心的状態に関する記述の分析 — 自閉症児の保育記録に関する記述から — 日本発達心理学会第9回大会発表論文集, p. 29.
- 川喜田二郎 1967 発想法 中央公論社
- 丸野俊一・岡崎容子 1998 第7章仲間遊びから学ぶ心 丸野俊一・子安増生(編著) 子どもが「こころ」に気づくとき ミネルヴァ書房 Pp. 171-204.
- 大井 学 1995 言語発達の障害への語用論的接近 風間書房
- 佐藤達哉 1997 第3章心理学で何ができるか — 違和感分析への招待 — やまだようこ(編) 現場(フィールド)心理学の発想 新曜社 Pp. 31-52.
- 田中昌人・田中杉恵(監修) 1996 遊びの中に見る1歳児 大月書店
- 笹屋里絵 1997 表情および状況手掛かりからの他者感情推測 教育心理学研究, 45, 312-319.
- 園田菜摘・無藤 隆 1996 母子相互作用における内的状態への言及：場面差と母親の個人差 発達心理学研究, 7, 159-169.
- 辻平治郎 1993 自己意識と他者意識 北大路書房
- 内山伊知朗 1997 幼児の感情表出に及ぼす母子関係の影響 同志社大学文化学年報, 46, 65-86.
- Yoder, P., & Feagans, L. 1988 Mother's attributions of communication to prelinguistic behavior of developmentally delayed and mentally retarded infants. *American Journal of Mental Retardation*, 93, 1, 36-43.
- 和田 実 1991 対人的有能性に関する研究 — ノンバーサルスキル尺度およびソーシャルスキル尺度の作成 — 実験社会心理学研究, 31, 49-59.
- Wilcox, M. J., Kouri, T. A., & Caswell, S. 1990 Partner sensitivity to communication behavior of young children with developmental disabilities. *Journal of Speech and Hearing Disorders*, 55, 679-693.

(博士後期課程2回生, 教育心理学講座)